

ミツアナグマ*と ミツオシエ



むかしむかし とお 昔々、ずうっと 遠い昔、大きな
おお もり かな 大きな 森に、悲しそうな 小鳥と、
ミツアナグマが 住んでいました。
ミツアナグマと 小鳥は 全く ちがう
いのちの 生き物でしたが、創造主は、両者の
あいだ ひと きょうどうてん そな 間に一つの共通点を備えられました。

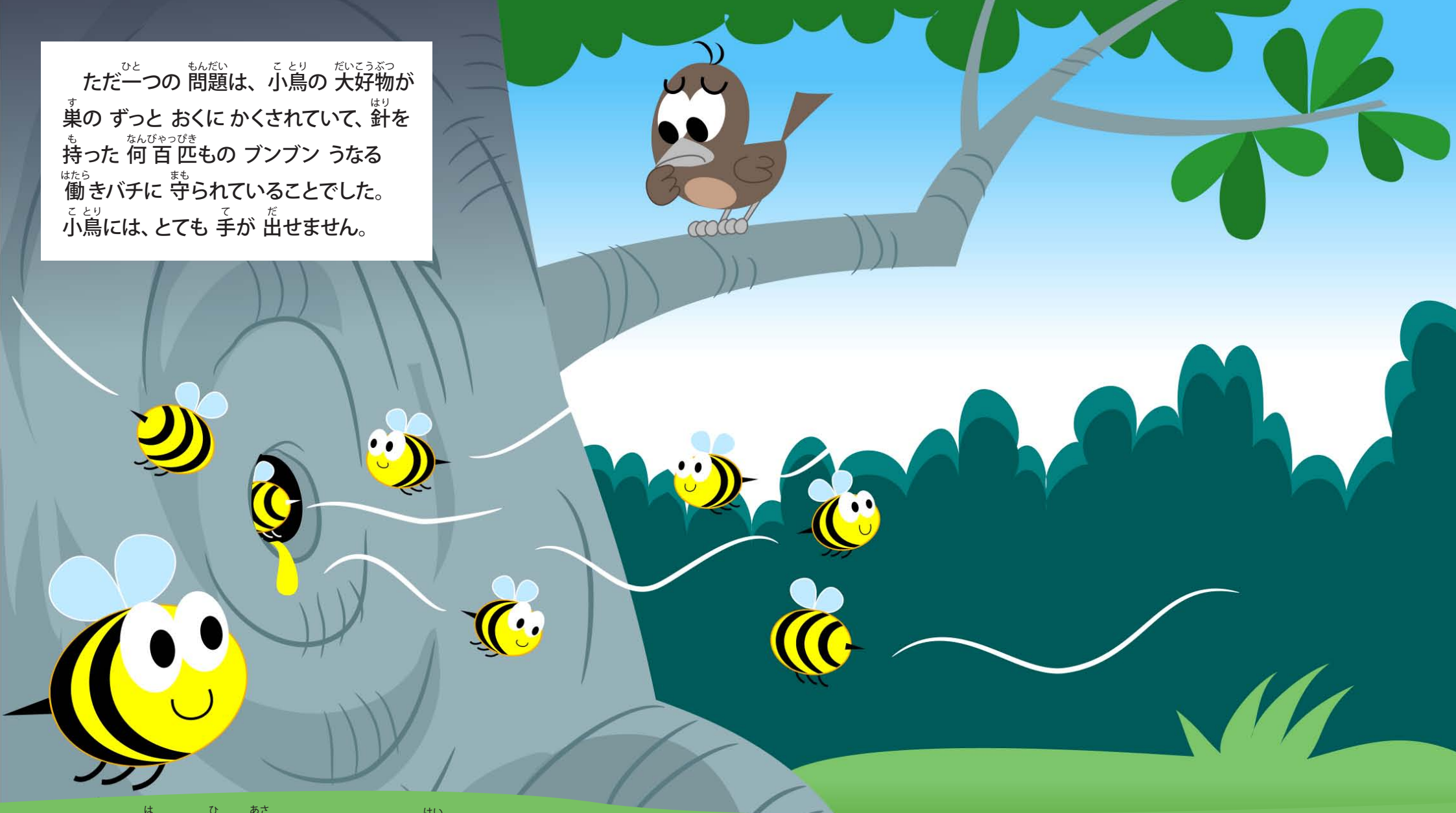
それは、両方とも ミツバチの 巣が
だいす 大好きだということです。
小鳥が 悲しんでいたのは、ミツバチが
む 群れになって うじゃうじゃ たかって

いる 巣が 森中にたくさんあるのを
知っているというのに、その中にある
おいしい はちみつに ありつけ
なかったからです。小鳥は、ミツバチが

*ミツアナグマは、ラーテルの 別名。

はちみつを たっぷりと たくわえこんだ
おいしい ミツロウを、思いっきり
たくさん 食べてみたくて しょうが
ありませんでした。

ひと もんだい ことり だいこうぶつ
ただ一つの 問題は、小鳥の 大好物が
す 巣の ずっと おくにかくされていて、針を
も なんびやつびき はり
持った 何百匹もの ブンブン うなる
はたら まも
働きバチに 守られていることでした。
ことり て だ
小鳥には、とても 手が 出せません。



ある 晴れた 日の 朝のこと。
ことり いま み
小鳥は、今までに 見たことのある
なか さいこう おお
中でも 最高に 大きな ミツバチの
す き えださき
巣がある 木の 枝先に とまりました。
そして、古い 木の みきの中にある
ふる き なか
巣から、ミツバチたちが 出たり

はい
入ったり しているのを、
ものほしそうに 見ていました。
なん て
何とかして はちみつを 手に
い あたま
入れたいと 頭を ひねるのですが、
かんが かんが のぞ
考えれば 考えるほど、望みが
おも
ないように 思えます。

す まわ かんぜん
ミツバチの 巣は、周りが 完全に
ふさがっていて、ハチが 入れる
ちい はい
だけの 小さな すきましか 開いて
いません。近くまで 行けたとしても、
ちか い
針で やられてしまうだけです。

し もと こ
「死んでしまっは、元も子も
ないわ!」 ことり
ひと ごと い
独り言を 言いました。



ちょうど その時^{とき}です。ミツアナグマが
よたよたと やってきました。

ミツアナグマも、ミツバチの 巣^すが
大好き^{だいす}です。ミツアナグマは、ミツバチの
巣^すを 見^みつけるたびに 巣^すをおそって、
大好き^{だいす}な はちみつを 最後^{さいご}の 一^{いつ}てきまで
なめてしまいます。ミツバチの 巣^すは
ミツアナグマにとって、格別^{かくべつ}な お気^きに
入^いりの ごちそうなのです。

「あ^きりや、今日^{けふ}は すごい ものを
見^みつけたぞ！」 木^きの みきに できた
ハチの 巣^すを 見^みると、ミツアナグマは

満足^{まんぞく}そうに 目^めを 細^ほめました。そして、
ハチの 巣^すに ねらいを 定め^{さだ}め、攻撃^{こうげき}
しせいで 身構^{みがま}えました。

ミツアナグマは、全^{まん}く ひるむことも
なく ハチの 巣^すに 突進^{とっしん}し、その

大部分^{だいぶん}を ひっぺがし、あつという
間^まに 大好物^{だいこうぶつ}を さらっていつて
しまいました。巣^すを こわされて
おこった ハチたちは、くるったように
針^{はり}で さし始め^{はじ}めました、

ミツアナグマは 全^{まん}く あわてる 様子^{ようす}も
ありません。ずっと この 様子^{ようす}を 見守^{みまも}って
いた 小鳥^{ことり}も、びっくり。ハチの 針^{はり}は
ミツアナグマには きかないので、
ハチなど ちっとも こわくなかったのです。

その時、小鳥に アイデアが ひらめきました。
「はちみつがある 場所を 教えてあげたら、
ミツアナグマは きっと、分け前を くれる はずだわ。
そうしたら、わたしたち、助け合えるじゃない？」
小鳥は さっそく、ミツアナグマが はちみつを

たいらげている ところへ まいおりていきました。
「ミツバチって、本当に おいしい はちみつを
作ってくれるわね。」
「全く その通りだよ！ もっと しょっちゅう
見つけられたら いいんだけどね。」
ミツアナグマは、口の まわりを
ぺろぺろ なめながら
答えました。

「わたし、あなたの 助けに なれると 思うわ。
どこに ミツバチの 巣が たくさん あるか、
知ってるの。もっと たくさんの はちみつが
食べられるわよ。」
「本当かい？」





「もちろんよ！ ミツバチの
す 巣には、わたしの だいこうぶつ
大好物も
あるの…。ミツロウに、
ようちゆう す み
幼虫よ。巣を 見つけるのは
かんたん
簡単だけど、わたしなら、

ごちそうに ありつく まえ
前に
やられちゃうわ…。でも、
あなたには そんな もんだい
問題は
ないみたいね。」
「ああ、ハチなんか

ぜんぜん
全然 こわくないよ。さされても
なん け がわ き
何ともない 毛皮を 着ている
はな
からね。まあ、鼻だけは
べつ
別だけど…。それでも、
ちょっと くすぐったいだけさ。」

ミツアナグマは、
わら 笑いながら こと
答えました。
「それなら、この計画は
かんぺきに うまく いくわね。」
ことり
小鳥が きっぱりと

い
言いました。
けいかく
「計画って？」
ミツアナグマは、 いったい なん
一体 何の
ことだろうと、きょうみ
き かえ
しんしんに 聞き返しました。

「あのね、まず わたしが
ミツバチの 巣^すを見つけて、
あなたに 教^{おし}えてあげるわ。
そうしたら、あなたが ハチの
巣^すを開^あけて、はちみつを
もらうでしょ。そして、ハチたちが
いなくなったら、わたしが 残^{のこ}りを
いただくってわけ。」

「そんなこと、全然^{ぜんぜん} 考^{かんが}え
つかなかったよ。最高^{さいこう}の
アイデアだね。ぼくたち、最高^{さいこう}の
友^{とも}だちになれるね。」

ミツアナグマは、うれしそうに
声^{こえ}を あげました。

こうして、後^{のち}に ミツオシエと
呼^よばれるようになった 小鳥^{ことり}と
ミツアナグマの おどろくべき
共^{きょう}生^{せい}関^{かん}係^{けい}が 始^{はじ}まりました。
その日以^ひ来^{らい}、ミツバチの

巣^すの ありかに 連^つれて行^いって
もらう たびに、お返^{かえ}しとして、
アナグマは 感^{かん}謝^{しゃ}の 気^き持^もちを
こめて ミツオシエに
分^わけ前^{まえ}を 残^{のこ}して おくのです。

きょうくん 教訓^{きょうくん}：チームワークは 最高^{さいこう}の 成^{せい}果^かを生^うむ。

文：STEPSカリキュラムの「Character Building: Working Together」より
Copyright © 2006年、オーロラ・プロダクションAG 使用許諾取得済
絵：ゼブ デザイン：クリスティア・コーブランド

出版：マイ・ワンダー・スタジオ Copyright © 2012年、ファミリーインターナショナル
“The Badger & the Honey Guide”--Japanese

<http://www.mywonderstudio.com/0-5/2012/6/25/the-badger-and-the-honey-guide.html>